

[新刊紹介] 万葉歌とめぐる野歩き植物ガイド 秋～冬,
海藻ハンドブック,

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00053581

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



新刊紹介

○山田隆彦・山津京子(著):万葉歌とめぐる野歩き植物ガイド 秋～冬 B6版変型, 190頁. 2013年10月20日. 太郎次郎社エディタス. 1,800円(税別).

既刊の「春～初夏」編, 「夏～初秋」編に続くシリーズの3冊目である。秋から冬に花を咲かせる植物, 紅葉や果実が見頃を迎える植物について, 栽培植物を含む186種が掲載されている。各種ごとに, 一言紹介となる見出しが付いており, 要領を得た解説と写真, そして万葉集に詠まれている33種については, 歌が歌意と共に紹介され, 万葉こぼれ話と題したコラムも挿入されている。また, 本の最初に, 野歩きの服装と持ちもの, 秋～冬の植物観察の見どころ, おもな植物用語の図説が掲載されており, 本の後半には, 万葉植物園への誘い(西日本編), 秋～冬の花を訪ねるおすすめ野歩きスポット, おもな植物用語の解説, 植物索引が配置されている。秋から冬の雨の日や寒さのきびしい日は, この本を片手に, 植物との出会いの計画を立ててみてほしいという, 出版の願いが伝わる構成である。植物写真は大部分が, 著者の一人, 山田氏による撮影であり, 葉や花序を入れた見かけを伝える写真の他に, 花や特徴的な形態の拡大写真も説明付きで加えられており, 植物の形の面白さを伝えようという気持ちを感じられる。山田氏は, 日本植物友の会の副会長兼事務局長を務めておられ, 多くの著作や植物観察会の開催を通して, 自然や植物の魅力を伝える活動をされている。全国の植物を見て歩かれ, 学会に参加されて最新の研究成果も理解されており, 植物の解説は信頼できる。山津氏の序文によれば, 万葉集に収録された4,500首をこえる歌のうち, 植物が詠まれている歌は1,700首あまりあって, 種としては160以上あるという。この小文の筆者も, 万葉歌と植物の関係に興味はあったものの, これまで縁無く過ぎて来たが, この本で縁をもらった気がする。様々な植物が詠まれているものだと, 改めて思ったが, 個人的には, サトイモを詠んだ歌が面白かった。どのような歌が気になる方は, この本を手にとられてみてはいかがでしょうか。(五百川裕)



○横浜康継(著):海藻ハンドブック B6版変型, 100頁. 2013年11月25日. 文一総合出版. 1,470円(税込).

文一総合出版のハンドブック図鑑シリーズの1冊である。日本の磯や浜辺を歩いているときに会える海藻の約150種を, 生育エリア別に押し葉標本や生態写真と簡潔な解説で紹介している。さらに, 海藻とは?, 海藻おしばを楽しむ, カラフルな海藻は語る, と題したわかりやすい解説もあり, 海藻といえばワカメしか知らない人のための海藻入門図鑑という出版社の宣伝文に合った構成となっている。生育エリアは例えば, 潮間帯という海底を歩く, 潮だまりというマイクロな湖, 春の磯で見る海藻の「花」, などのタイトルで9章に区分されていて, 各章冒頭に環境の特徴と海藻の見どころが代表的な種をあげて記載され, 概要を知ることができる。続く各種の解説ページは, 序文で著者が強調している, 海藻はカラフルで造形の妙に富む美しい生物である, ことを具体的に示す美しい写真で構成されている。著者によれば, これまで我が国で出版された海藻の図鑑において, 専門外の人が写真と説明から見分けることのできる種類はかなり限られるそうで, 本書では分類ではあまり重視されない種ごとの生育環境について, できるだけ生態写真を添えて, 専門外の人に理解されにくいような説明は省くようにしたという。この小文の筆者は, 小中学生の標本展の審査に呼ばれて行くことがあるが, その時に, 海藻の標本もあり, とてもきれいに作られているものの, 同定の妥当性を評価できずに困ることがある。筆者の不勉強が大きな原因であるが, 同定の不確かさは, 子どもたち, あるいは指導する先生方が, 海藻に詳しい人に聞けない場合に, 頼りにできる適当な入門図鑑が普及していないこともあると思われる。本書は, 小中学校で備えるのに好適な海藻入門図鑑であると考えられ, 海藻研究45年の著者が願う, 本書を携え海辺で美しい海藻たちに触れながら, 彼らの訴えに耳を傾けることに導いてくれるガイドブックである。(五百川裕)



○八田洋章編集：冬芽と環境—成長の多様な設計図— 環境Eco選書10 A5版340頁. 2014年12月20日. 北隆館. 4600円(税別)

植物は四季の移り変わりにしたがって姿を変える。とりわけ、冬から春にかけての変化は目を見張るものがある。その立役者は言うまでもなく冬芽であり、だれもが目にする日常的なものである。冬芽が過酷な時期を乗り越える越冬器官であることはよく知られている。しかし、冬芽のダイナミックな変化となると、案外知らないことが多い。私も暑い熱帯・亜熱帯で乾期に落葉する雨緑林に対して違和感を覚え、芽に思いをはせたものである。また、かつて、一人の学生が小石川植物園で、カエデの冬芽構造と枝伸長の適応戦略を研究していたのを見ていたので、冬芽に関心があった。そんなわけで、本書は気になる本である。

ここに紹介する「冬芽と環境—成長の多様な設計図」と題する本は、長年この現象に魅せられ、樹木の生物季節フェノロジーを追い続け、樹形研究会を主宰する八田洋章氏が編集した一冊である。八田氏は日本国内の植物は言うに及ばず、インドネシアにも出かけ熱帯の樹木について観察を拡げて、冬芽をつけない熱帯植物も対象にして、「冬芽」を明らかにしようとする。21名の分担著者と編著者としての八田氏の計22名はいずれもその分野で活躍する専門家であり、4つの章17の節を担当し、冬芽についての序論から、針葉樹から各種被子植物までさまざまな植物群の冬芽、タケのような草本の冬芽、さらには冬芽の遺伝的背景まで内容は豊かである。当然、冬芽から枝伸長に至るフェノロジーも含まれる。さまざまなテーマでコラムが9つ挿入されてアクセントが入っているほか、シダやコケの冬芽などが題材に取り上げられ、意外性もある。

以上のように本書は、変化する環境の中で現れる冬芽のダイナミックな動きを解説する。冬芽を観て本書で調べ、また冬芽を再観察することを繰り返すと、冬芽についてますます関心が高まると期待される。

(加藤雅啓)

